

巻頭言

恐ろしい体験

電気工学科 小坂 洋明

今回の巻頭言を担当することになった。高校生や大学生の頃、巻頭言のような始めの方に書いてある文章を見たことはある（読まずにとばしていた気もする）が、自分が書く立場になるとは想像もしていなかった。

人目につく文章を書くというのは、恐ろしい体験である。特に今書いているような、エッセイのような文章は。端的に言えば、馬鹿がばれる。知られたくない自分の知能の程度、性格、思想信条や嗜好まで全て、読む人が読んだら読み取られてしまう。読んだ人に次に会ったら鼻で笑われる、と読まれる前からびくびくしてしまう。文章に限らず、他人に何か情報を発信する時には多かれ少なかれ自分をさらけ出すことになる。その点、文字どころの話ではないYoutuberはどう思っているのだろう。

その点、技術文書や理系の学術論文を書くのはいい。構成は決まっている。自分の主観やレベルは関係ない。論理的な流れを作り、それに従い客観的なことだけ積み上げ、結論に至ればよい。学生の頃はそう思って書いていたが、他人の論文を読むうちに、短く明快に本質を突いた書き方の論文や、主観的だが説得力のある論理展開で結論を導く論文を読むと、結局自分の素性がばれるのは変わらないことに気がついて、またびくびくしてしまう。何か文章を書く度にびくびくしては仕事にならない。カウンセリングを受けて、心の整理をした方がいいかもしれない。自分の書く文章や論文は残念ながらごく少数の方、何となれば誰も読まないから大丈夫、と心を落ち着かせ、文章を書き続ける。

10年ほど卒業研究を担当している。毎年、何人かの卒業論文の第一稿を読む羽目になる。ほとんどは非論理的で何が言いたいのか分からないし、話の流れはからまったコードのように無秩序で、読むのに疲れるし時間がかかる。文句を言って突っ返したくなるが、自分も同じ頃平気で大差ない文章を書いていたことを思い出し、黙って読みにくい文章を読み続ける。

たまにいきなり良い文章で書いてくる卒研生もいる。成績優秀な学生とは限らない。話を聞いていると、共通点は実験レポートを自分でよく考えて書いていた、あるいは本が好きで沢山読んでいた、のようである。よく言われていることであるが、良い文章を書くためにも本をたくさん読むことは必要である。学校が推奨する本には目もくれず、星新一のショートショートや作家の小説でなくエッセイばかり読んでいても、読まないよりはずっとよいはずである。多分。

世界の15歳の中で日本人は読解力が急激に低下している、と最近のニュースにあった。試験の際、そもそも問題文が正しく読み取れていないと思われる学生が増えている、という話も耳にする。今の若い人に、何でもいから本を読んでほしい、飛ばし読みでなくじっくり読むことができるようになってほしい、と思う。あと何年、何十年か経ち、何か書かなければならなくなった時のためにも。